

人と地域を繋げる保育の創造

— 弓削保育所の実践報告 —

京都市弓削保育所 湯 谷 道 雄
教育学科 高 橋 司

抄 録

弓削保育所は、京都市の北の果て、過疎地域にある小さな保育所です。それだけに保育の活性化を図らなければなりません。そのために地域ぐるみで様々な取り組みを起こしました。保育を語り、想いを伝え、保護者や地域の方々に協力をいただくことにより、子どもの姿が変わり、周りの大人や地域がより子どもたちのことを知り、地域全体が元気になることで地域が持続していくことに繋がればと願って、保育環境の改造に取り組んだ実践記録です。

Key Words：保育環境 地域 保護者 公助・共助 文化の伝承

1 弓削保育所の概要

弓削保育所は京都市右京区京北域の中東部に位置する。弓削地域の人口は1,600人（京北全体約5,200人）で、過疎の農村地域である。京北全体が丹波高原の中にあり、豊かな森林、田園、色鮮やかな草花、そして蛍が舞う清流など日本の原風景が残っており、自然が豊かに感じられる。

子どもの育ちにとって素晴らしい環境があるにも関わらず、少子高齢化が進み、保育所周辺や京北第3小学校区では子育て家庭が年々減ってきている。また子育て家庭が点在しているため、地域の中で子どもや保護者が交流する機会が少なく、育児不安を抱えている保護者も少ない。

京北域にある3つの小学校も統合の計画が出ており、弓削地域にある京北第3小学校も統合の可能性が出てきている。小学校統合後は、地域に子育て家庭が集まる施設が保育所に限られ



園庭から見た弓削保育所

るため、京北周辺部の子育て環境は、より一層の工夫が求められる。

平成27年度は京北地域が京都市に編入された10年目の区切りの年であり、8月に京都市文化市民局が「京都 京北未来かがやきビジョン^注」を策定した。その中で、若者や子育て世代を中心とした定住促進、新たな雇用創出などに照準を合わせた各種施策が盛り込まれている。『子育て』も重点戦略に掲げられており、“地

域力を活かした「公助・共助」による子育て支援の推進が進められている。

弓削保育所は、京北域の子育て施策を担っている公立保育所である。この地域の可能性を信じて、未来を見据えた保育と子育て支援を果たしていきたい。

2 子どもの様子、保護者の様子

平成28年度4月当初は39名の子ども達、13名の職員で保育が始まった。前年度は職員の退職が多かったため、保育士は正職員1名、嘱託職員（週4）1名の2名以外は所長を含め全て新しい職員で、子どもも保護者も職員も不安の多いスタートであった。

まず、子ども達の姿や課題を検討し、職員会議の中で、子ども達が一人ひとり「自分らしく」成長することを願って、何を大切にして保育を進めていくのかを話し込んだ。同時に保護者に丁寧に保育を伝え、信頼関係を築いていくよう心掛けた。

4月の子ども達の様子を一言で表すと「行儀正しく良い子」である。「挨拶」や「片付け」

は驚くほどに上手であった。大人の話したことを良く聞いていて、設定保育などの場面では大人の指示通りに動くことが出来た。しかし自由遊びの場面では困る子が多く、自分から好きな遊びを見つけるという姿よりも、大人の「指示」を待って、動こうとする姿があった。頻繁に保育士に「〇〇して良いですか？」「次は何をしたらいいですか？」と聞きに来た。決められた遊びは出来ても、大胆に遊びこみ、自ら工夫したり、挑戦したりという姿は少なかった。

また自分の気持ちを言葉で伝えることが苦手で、嫌なことがあると「すねる」「飛び出す」「怒る」などの姿が目立った。身体つきも幼く、特に体幹の弱い子が多かった。京北域ではどこに行くにも距離が遠く、交通手段が限られたなか、車で移動をすることが多いため、歩く経験が少なく、身体がしっかりと出来ていないと感じられた。

保護者は丁寧で礼儀正しい方が多い。送り迎えの際に毎日職員室に「今日もよろしくお願ひします」と挨拶に来られるほどである。地域柄、隣近所で気軽に助け合ったり、お互いを気にか

◇表1 職員配置数、児童数

0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	合計
2	3	9	7	11	9	41
	所長	正職員	嘱託（週4）	嘱託（週2）	アルバイト	配置数
保育士	1	5	3		2	8.0
調理師			2	2		2.0

※京北域の保育所は、副所長の配置がない。

◇表2 児童数の推移

	H22	H23	H24	H25	H26	H27
年度初め	58	59	53	47	38	39
年度末	65	65	55	55	44	44

けたりと、良好な人間関係である。また子育てでは、子どもに愛情をかけ大切に育てられている。一方で、子どもに「良い子」であることを求め過ぎ、挨拶や朝の準備など、親が先回りをして「タオルかけておいで」と指示をしたり、必要以上に子どもにやり直しを求めたり、気になる姿も見られる。また遊びでは、親子で一緒に遊ぶというよりも、なるべく怪我をさせないように、危険なことを子どもがしないよう、見守ったり声をかけたりと、安全面を気にされていた。

3 保育のねらいと目標

職員会議では、子どもと保護者の様子から、今年度の保育の目標を議論した。結果、子どもを大切に育てる保護者の思いを大切にしつつ、乳幼児期に大切な「身体」の発達を保障したいと考えた。

人間の根っこにあるのは「身体」であり、走ったり跳んだり、手指を動かし何かを作ったり…乳幼児期は、その刺激を直感しながら体全体で感じる力を育てる

一番大事な時期である。そのためには五感を駆使しワクワクドキドキしながら夢中で遊ぶ体験をさせてあげることが必要だと考えている。子ども達は「遊び」を通して五感で感じ、失敗や挑戦を積み重ね、学んでいく。その経験のなかで子ども達が感じ、揺れ動いた心を、大人に伝えたいと話しかけ、保育士はその言葉の裏側にある「気持ち」をしっかりと受け止めていきたい。そのような保育の営みを大切にするために、



図① 弓削保育所
パンフレット

子ども達がしっかりと遊び込める環境を作り上げることを重点課題にすることにした。特に今年度は子ども達が長い時間を過ごす「園庭」の環境に焦点を当てた。

取り組みにあたっては、保育所が「子どもの成長にとってこれが大事だから、こうして欲しい」と一方的に保護者に伝える方法とはなかった。むしろ「百聞は一見にしかず」とことわざにもあるように、積極的に保護者に関わってもらうことにした。保護者と保育士が子ども達のために一緒に作業をするなかで、子ども達の育ちについて話し合い、子ども達の変化や成長を感じてもらおうと考えたからである。合言葉は「大人も一緒にワクワクドキドキ」、大人も一緒に楽しめる雰囲気作りを大切にしたい。

また、保育所内だけで取り組むのではなく、保育の想いを地域に発信し、地域も一緒に参加してもらえるように心掛けた。取り組みの経過のなかでは、自治会や民生委員、森林組合や農協、北桑田高校、商店など様々な社会資源に助けてもらった。「保育所のために」と力を貸してもらえることは保育所にとって大変ありがたいことであると同時に、保育所のことをよりよく知ってもらい良い機会になったのではないかと感じている。このような関わりの積み重ねが、地域全体の子ども達のことをもっと身近に感じ、考えてもらえるきっかけになるのではないと思う。地域に根差した保育所として、地域の方々と一緒に協力して、その経過を繰り返しながら、地域の子育て環境をより良いものにしていきたいと考えている。

4 すべてはここからはじまった！ ～竹のすべり台づくり～

保育環境を整えるにあたって、まずは職員が汗をかき努力している姿を、子ども達や保護者に見せていかなければと思った。保育が始まっ



写真① 後日弓削自治会から保育所近くの竹林の使用許可を頂き、その後の作業がはかどった。



写真② 竹の雑巾掛け

た頃の4月の2週目、保育士と調理師、修了生の協力も得て、京北の竹林に竹を切り出しに行った。竹をロープで引っ張りながら、ノコギリで竹を伐採し(写真①)、山から降ろし、トラックで保育所まで運んだ。

翌日、子ども達と竹を洗い、雑巾がけ(写真②)をして、既存のジャングルジムに大きな竹を2本、ロープでしっかりと結わえ、すべり台にした。写真③の「竹のすべり台」である。自然の素材でかつシンプルであることが、子どもの想像力をかきたてたのか、日々子ども達が様々なすべり方や登り方を編み出した。

この出来事が、子どもの「遊び」と「育ち」について保護者と一緒に話し合い、考えていくきっかけとなった。今まで危ないことを極力避

けてきた保護者である。竹のすべり台で大胆に遊ぶ姿を見ながら、「こんな高いところに登って大丈夫?」「竹の遊具なんて危ない?」「うちの子は大怪我しないかしら。。。」「という質問をされることもあった。質問をしてもらった時が「保育を伝える」チャンスであると、保育のねらいを丁寧に繰り返し伝えていった。

<考察>

子ども達の様子は、見違える程変化した。様々な遊び方を試そうとする子ども、年長児がダイナミックに遊ぶ姿を見てどうしたら出来るのか食い入るように見つめる子ども、友達同士で協力してもっと大胆に遊ぼうとしている子ども等、新しいことをして試してみようとする姿が見られた。保育士は安全に配慮しながら、 unnecessary 声掛けや手助けをせず、子どものやりたいという気持ちを大切にしておくようにした。時には高い遊具に挑戦しようと登ったものの「怖い」と感じ、自分で降りている姿もあった。自分の身体を試すことによって自分の身体の使い方を知り、見る力、真似る力など様々な力をつけ、「楽しい」「やってみたい」「危ない」などいろいろな感情を知り、経験することで学んでいるのだと思った。そんな様子を見てみると、子どもが主体的に意欲をもって遊び込める環境は、子どもの成長にとって最も大切であると実感した。



写真③ 竹のすべり台

5 ほんまものの体験を！ ～保護者と一緒につくった田んぼ～



写真④ 園庭に新しく完成した田んぼ

次に取り組んだのが、園庭に新しい田んぼ(写真④)を掘り、田植えをしたことである。保育士が園庭の端に鍬で穴を掘っていったが、園庭の土は山の赤土であり、粘土質で鍬が何度も曲がる程ものすごく固かった。作業がなかなか進まず、毎日毎日ひたすらに掘っていると、送迎で通りかかる保護者が「そんなに頑張らなくても発泡スチロールでもできるでー」と教えてくれたり、「山の赤土で作るお米は美味しいんや」と話すおじいちゃんもいた。送迎時に田んぼ作りを手伝ってくれるお父さんも出てきた(写真⑤⑥)。

京北域は農村地域で田んぼは多いが、祖父母世代が田の管理をされており、子ども達が実際に手伝ったりする機会が少ない。発泡スチロールではなく、実際の田んぼを作ることによって、田んぼの匂いや、泥の感触など、子ども達に肌で感じて欲しいという思いがあった。しかし、すべての作業を行うことは保育所だけでは難しく、田んぼの土を入手しなければならないこと、この地域は獣害がひどく園庭に鹿が入ることもあり対策が必要なこと、田植えに詳しい人に教えてもらいたい等、助けが必要だった。

送迎の時間に保護者に保育の思いを話し、協



写真⑤ 大活躍の専業農家のお父さん



写真⑥ 保育所の帰りにご家族で

力してもらえないか保護者に尋ねた。尋ねてみるとすぐに協力してもらえるお父さんが見つかった。田んぼの泥は、そのお父さんと一緒に田んぼに取りに行き、トラックで運んだ。作業をしながらお父さんと話し、今の農業を取り巻く厳しさや、田舎に移住してきて地域に溶け込む苦労、子育て観の話など深く知ることが出来て、良い機会になった。獣害対策の支柱や網もお借りすることができ、ようやく園庭に小さな田んぼが完成した。

田んぼに水を張ると、早速子ども達が走り込んできて、泥に飛び込んだ(写真⑦)。「せんせい、ぬるぬるする」「なんかむっちゃばかばかするわ」とそれぞれその感触を楽しんだ。全身泥まみれになって、身体の芯から遊んでいる姿が見られた。



写真⑦ 泥んこダイブを楽しむ子ども達



写真⑧ 田植えの様子



写真⑨ 日本農業新聞の記事

いよいよ田植えである。作業を手伝ってくれていたお父さんの紹介で、地域の農協とつながることも出来た。お米のプロ（農協の担当者）に教えてもらい（写真⑧）、田植えを経験する子ども達の姿が、「日本農業新聞」近畿欄や北

桑田地域の農協冊子「ばあとなあ」にも紹介された（写真⑨）。

<考察>

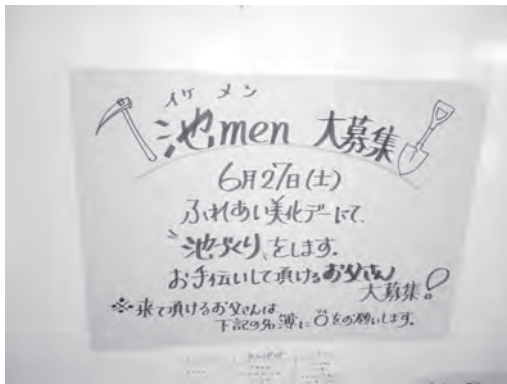
取り組みにあたって保護者をはじめ、様々な地域の方と繋がり協力してもらえることで、無事に田植えまで行うことが出来た。子ども達は、保育士が分からないことを地域の人に教えてもらう姿や、田んぼ作りで大人達が協力している姿を、肌で感じていた。前向きに協力し田んぼを作りあげる大人達の姿は、子ども達同士の人間関係にも良い影響を与えるのだと思う。また作業中には、保育士も保護者も一緒に汗を流し、子ども達の育ちを語り合った。その時間は、普段面談などで保護者と話すよりも、ずっと気軽により深く話しをすることが出来た。作業だけではなく、子ども達のことを話し合えた貴重な時間となった。田んぼ作りを通じて、単に稲を育てる活動だけに留まらず、子ども達にとっても大人達にとっても、大きな収穫を得られた。

6 命の営みが見える園庭へ ～みんなで頑張った池づくり～

豊かな自然にいだかれる京北で「大切な自然と季節を感じながら五感をフルに活かして遊んでほしい」と願っているが、保育の中で十分に取り入れられていない状況があった。幼少期に自然豊かな京北で遊び込み、「心の底から楽しかった」という原体験が、この地域をいつまでも好きでいてくれる土台になるのではないかなと思う。

そこで「子どもがいつでも行ける・見える身近な自然が欲しい」という思いと「命の営みが身近に感じられる園庭を作りたい」という思いから、職員・保護者・地域の方・ボランティアで力を合わせて、大きな池を作ることになった（写真⑩）。

最初で最大の難関は重機を借りることであった。



写真⑩ 保護者会が作成してくれた
ボランティア募集のポスター

地域で重機を見つけたら声を掛けたり、人を紹介してもらったりしながら、たくさんの人に尋ね回った。ようやく民生委員の方が「京北の子ども達のためなら」と力を貸してくれることになった。重機の作業は、あえて保育中をお願いした。大人が仕事をしている姿を身近で見る機会が少なくなった子ども達にとって、大人が一生懸命に働いている姿を見ることは、とても良い経験になったと思う。しかも子ども達のために、目の前で重機を使って池を掘ってくれているのである。その姿を見て、スーパーヒーローでも見ている眼差しで、いつまでも作業を眺めていた（写真⑪）。作業終了後に子ども達は民生委員の方に駆け寄って「ありがとう」とお礼を言っていたが、心からの言葉だったと思う。



写真⑪ 重機の作業を見つめる子ども達



写真⑫ 池づくりの作業。お父さん達が頑張った！



写真⑬ 池の横には北山杉の飛び石も

そして6月27日、総勢86名で池作りを行った。汗まみれ、泥まみれの作業になったが（写真⑫⑬）、子ども達にお金で買って与える玩具ではなく、大人達が協力して作った丸太の飛び石、大きな池。子ども達はしっかりと思いを受け止めてくれたと感じている。今でも「この池、お母ちゃんとお父ちゃん達がつくってくれたんやでー」と誇らしげに話している。

<考察>

池が完成（写真⑭）してしばらくすると、トノサマガエルの主が住み、トンボが飛び交い、ヤゴやタガメが泳ぎだした。睡蓮の花が咲き、秋には池のほとりでコスモスの花が揺れていた。散歩中に捕まえたメダカやアカハラを池で飼う楽しみも増えた、まさにビオトープになったのである。そんな経験を繰り返しているうち



写真⑭ 完成した池の様子

に、今までは生き物を捕まえても飼育ケースに入れ、逃がすことを嫌がっていた子ども達が、生き物と触れ合う経験が増えたことと、園庭に生き物が多く棲むことによって、当たり前になりに生き物を自然に帰すようになった。

「生き物を大切に」と言葉で教えるより、生き物とたくさん触れ合うことで、子ども達は生き物達と会話し、自然に身に付けていくものだと実感した。

7 命の恵みを頂いた ～食文化の伝承～

農家のお父さんの農業指導と、獣害対策の成果もあり、園庭にある畑は溢れんばかり作物が実った。枝豆、アスパラガス、ナス、トマト、オクラ、里芋、特にとうもろこしは誰もが驚く



写真⑮ よもぎ団子クッキング

くらいの豊作であった。畑以外にも自然の中での収穫物で作った料理は、ワラビの天ぷら、ヨモギ団子 (写真⑮)、桜とつくしとたんぽぽのかき揚げ等々、数えきれない程である。乳児の頃からたくさん経験しているので、何が食べられて美味しいか子ども達はよく知っていて、散歩に行くと子ども達が「これたべたい」と自ら採ってくる。「知識が景色を変える」という言葉があるが、何気ない畦道を歩いていると、子ども達には雑草ではなく、宝物に見えているのかもしれない。昨年に修了した子どもが親を連れて「保育所で食べたよもぎ団子がもう一度食べたい」と作り方を教わりにきた。こうして保育所の体験を通して、食文化が自然に伝わっていけば良いと思う。

<考察>

大豊作であったとうもろこしであるが、年長児活動としてクッキングをし、焼きとうもろこしにして食べた。

収穫したてのとうもろこしの皮を剥き、茹でるのは昔から伝わる「おくどさん」を使った (写真⑯)。薪に火をつけるところから始めて、ぐつぐつ湯が沸くのを待つ。その間に炭を起こし、段ボールで作った簡易オーブンの準備をした。

薪がパチパチと音を鳴らし、炎が踊りだす。煙がくさいと逃げたりしているうちに、とうもろこしが茹で上がった。出来上がったハニー



写真⑯ はじめて使う「おくどさん」に興味深々



写真⑰ 採り立て、茹でたての味は格別！

コーンは夏の味（写真⑰）である。「ほっぺたがおちそうや」と笑いながら食べる子ども達は何ともいえない表情をしていた。今は使われなくなったおくどさんも活用し、不便を楽しむのも良い経験になった。

他に「朴葉寿司」を調理師が弁当にして、散歩に出掛けたこともあった。昔は農作業の合間に手軽に食べられると京北域で親しまれてきたが、今では見かけることは少なくなった。子どもに経験させたり、保護者にも作り方を伝えるなどして、地域の食文化を積極的に伝えていきたい。

8 保育を発信する ～保育を伝え、繋げていく～

積極的に新しい取り組みに挑戦した今年度は、保育を発信していくことに力を注いだ。まずは保育の中身をしっかりと伝えるように意識した。入所している保護者に対しては、保育を丁寧に伝えることで保育を理解し安心感を持ってもらえたと思う。その結果、積極的に取り組みに参加される姿が出てきた。保育を理解されるうちに子どもの見方が変わり親子関係が良くなったケースもあった。地域向けの情報には、保育所に来て出来る情報を分かりやすく伝えることで、園庭開放を利用する地域の親子が気軽に来られるようになった。親子で遊びに来たの

にむしろ親のほうが夢中になって田んぼでカエルを捕まえる姿が印象的であった。園庭開放の利用者も飛躍的に増加した。

またホームページやポスター等を利用して、保育の情報発信先を広げていった。その結果、保護者に保育の様子を伝える、地域の子育て家庭向けに園庭開放や各種の事業などの情報を伝えるという従来行ってきた役割以外にも、地域の方が保育所の活動を知り様々な協力が得られ地域との繋がりが広がったり、京北域での子育てや移住に関心を持っている他地域の子育て家庭から問い合わせや実際に事業に参加されたりと、保育所の果たせる役割が広がったように思う。情報発信する頻度が増え、様々な人の目に留まることになったせいも、過去にはなかった地域の新聞やフリーペーパーから打診があり、保育所が紹介されることもあった。

情報発信を積極的に行うことによって、その後様々な形として保育所に受信されることが分かった。受信されたことを保育にいかし、また発信しというその積み重ねをすることによって、保育所の役割を高めていくことがあるのではないかと。今後も工夫を重ねていきたいと思う。弓削保育所で行ってきた保育の発信方法を、次に紹介したい。

① わくわくだより（入所世帯向けに配布、 保育所に掲示、ホームページに掲載）

保育所のわくわくドキドキを発信したいと、保育所だよりとは別におたよりを新設し、毎号テーマを決め、不定期に発行した。出来るだけその時期の保育で伝えたいことを詳しく分かりやすく記事にすることを心掛けた。

- 1) 弓削保育所の今年度、大きなテーマは「遊び」
- 2) 子どもの運動発達と安全面から、大人の役割を考える
- 3) カブトムシがやってきた！号外

- 4) どうせやるなら、ほんまものの体験を！
号外
- 5) 食べることは、生きること ～弓削保育所の食育の取り組み～
- 6) 園庭にユンボがやってきた！池づくり、本格始動
- 7) 描きたい、作りたいと思った時に、取り組める環境へ

② 保育を伝える写真展(夏祭りや運動会等、多くの方が来所される行事の際に)

保育の様子を写真に撮り、段ボールの台紙に飾り、ホールや廊下、保育室等に展示した。入所している親子だけではなく、地域の方、園庭開放で遊びに来られた保護者など、色々な方に保育を知ってもらうことが出来た。取り組みが良く分かったと評判であった。保育士と保護者が同じ写真を見ながら、語り合うきっかけにもなった。



写真⑱「保育を伝える写真展」の様子

③ ホームページの発信

ホームページを利用し、四期ごとに写真を織り交ぜ保育の様子を伝えたり、地域の親子が保育所に来て出来ることを分かりやすく紹介した。ホームページのトップページに素敵な挿絵を描いてくださったのも、地域の方のご厚意である。

◇いのち紡ぐ弓削の里

<http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000187261.html>

豊かな自然の中で生き生きと育つ子ども達の様子を、写真とともに紹介している。

◇地域支援「ぴよぴよ」をご利用の方へ

<http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000182569.html>

毎月の子育て通信の掲載や、園庭開放、半日親子保育所体験など保育所に来て出来ることを項目別に紹介している。



図② 弓削保育所のホームページ

④ ポスターの掲示

京北域の子育て世帯だけでなく、京都市内の子育て世帯にも積極的にアピールをし、園庭開放を利用してもらうことで、京北を知ってもらう機会を作ろうとポスターを制作し、公的機関、主要施設（道の駅、キャンプ場など）に掲示してもらった（図3）。



図3 京北の保育所を紹介するポスター

9 まとめ

竹林に伐採に行き、必死に穴を掘った4月。振り返ると異動して子ども達に初めて出会って、何かを変えたくて、夢中で身体を動かしていた。職員集団も大幅に変わったなか、取り組みを進められたのは、何でも言い合える職員関係の同僚性があったからではないかと思う。やりたい想いがあり、保育を語る。所長・保育士・調理師の立場を越え、職員誰もが弓削の子ども達のことを考えた。時には計画が後先になることもあったけど、その場その時に「子どもにとってプラスになるか」という視点で話し合うことが出来た。取り組むうちに保育の共通理解も深まり、誰が質問されようと保育を語れるようになった。自分自身この職員集団で前向きに支え合いながら保育が出来て、本当に幸せだと感じている。

最近の子ども達を見ると、自分のやりたい思いをしっかりと出し、意欲的な姿が出てきている。また、一人の力でやりきることが難しかったら友達に聞いたり協力したりと、人と関わる力がついてきた。それは田んぼ作りや池作りの過程で、子どもを取り巻く大人たちがひたむきに汗を流し、協力し、挑戦したからだと思う。保育士が「頑張れ」と言葉にするのは容易いが、実際に大人達が課題に向き合う姿を見せることで、子ども達は感じ取って学ぶのである。

取り組みを通して、様々な人と地域の協力を得て、私たちだけでは到底出来ない保育を創ることが出来た。それは保育士が保育を伝え、想いを言葉にし、発信していったことがきっかけになったのだと思う。人と地域の繋がりが保育を創ったし、保育を創ろうとしたことで、人と地域が繋がったのだと確信している。

京北地域では、地域力を活かした「公助・共助・自助」の子育て環境が問われている。過疎化が進むなか、安心して子育てが出来る環境作

りは、保育所だけでは難しく、地域住民の力は必要不可欠となっている。保育を保育所内だけで行うのではなく、地域を積極的に活用し協力し合うことによって、京北の子ども達の育ちを共に考え、良き協力者が育っていく。そのような積み重ねをすることによって、保育所が子育ての施設だけではなく、過疎や少子化といった直面している課題を乗り越えられる「地域の核」となる施設になるのではないだろうか。保育の持つ力の可能性が広がり、地域の未来を切り拓くことを期待している。

また食を通して、子ども達と楽しみながらこの地域に失いつつある文化を保育に織り込んでいきたい。文化の伝承とともに、子ども達が「この地域に生まれてきて良かった」、「この地域が大好き」という郷土愛が育めたらいいなと思う。幼少期にこの地域で育ったことが嬉しかったと思えた子ども達は、それぞれの道を歩みながら、心のどこかで京北の未来を考えてくれるのだと思う。

弓削保育所の取り組みは、まだまだ始まったばかりである。保育のねらいを保護者や地域に伝え、多くの人と地域と繋がることによって、この地域がいつまでも存在し続けるように、積極的に役割を果たしていきたい。

○注 「京都 京北未来かがやきビジョン」

右京区京北地域について、京都市との合併(平成17年4月)以降、「京都市・京北町合併建設計画」及び「京都市過疎地域自立促進計画」に基づき、各種事業を着実に実施し、発展に向けた土台づくりに取り組んできたが、地域活力の低下が懸念されているため、合併から10年を一つの契機として、魅力溢れるこの地域をしっかりと未来に引き継いでいけるよう、京都市市民文化局が「京都 京北未来かがやきビジョン」として平成27年8月に策定した。

<参考文献>

宮里六郎『過疎化地域の現状と課題』ちいさいなか
ま社、2014

棚橋啓一『子どもは発達まっ最中 主体性・柔軟・
関わり・集団』文理閣、2015

小泉昭男『自然と遊ぼう 園庭大改造—命の営みを
感じられる園庭に』ひとなる書房、2011

小田切徳美『農山村は消滅しない』岩波新書、2014

本実践報告においてご指導いただいた佛教大
学高橋司先生に心より御礼申し上げます。